

LEVEL

5

# 地獄変

芥川龍之介





# 地獄変



ほりかわ おおとのさま すば ひと  
堀川の大殿様のような素晴らしい人は、

むかし  
昔にもいなかったし、これからの時代にも、いないでしょう。

おおとのさま こと すべ よそう こ  
大殿様がした事は全て予想を超えるものでした。

ほりかわ やしき おお りっぱ ふつう ひと  
堀川のお邸の大きさと立派さは普通の人では

おも う  
思い浮かべられないほどです。

おおとのさま じぶん ぜいたく い かた  
大殿様は、自分だけで贅沢な生き方をするよりも、



した もの こと かんが かつ  
下の者の事まで考える方でした。

おおとのさま じんせい  
大殿様の人生には、ずっと語りつがれるような出来事がたくさんありました。

できごと なか いま かほう  
たくさんある出来事の中でも、今や家宝となっている「地獄変」の屏風の話は、最も恐ろし

いものでした。

おとのさま  
いつもは落ち着いている大殿様も、その時だけはひどく驚かれたようでした。

み わたくし たましい ぬ い  
そばで見っていた私たちが、こわくて魂が抜けそうになったのは、言うまでもありません。

わたくし おおとのさま にじゅうねん つか  
私は大殿様に二十年も仕えていましたが、あんなに恐ろしい事は見た事がありませんでした。

おおとのさま つく  
ですが、大殿様が作らせた「地獄変」の話をする前に、それを描いた、画家の良秀について話  
しておかなければなりません。

よしひで え  
良秀は、絵のうまさではその右に出る者はいないと言われるくらい有名な絵師でした。

がいけん  
しかし外見はひどいものでした。

背<sup>せ</sup>が低<sup>ひく</sup>くて、骨<sup>ほね</sup>と皮<sup>かわ</sup>ばかりにやせていて、意地悪<sup>いじわる</sup>そうな年<sup>とし</sup>寄り<sup>よ</sup>でした。

口<sup>くち</sup>の悪<sup>わる</sup>い人<sup>ひと</sup>たちは、良秀<sup>よしひで</sup>の歩<sup>ある</sup>き方<sup>かた</sup>やしぐさが猿<sup>さる</sup>みたいだと言<sup>い</sup>って、猿秀<sup>さるひで</sup>というあだ名<sup>な</sup>までつけ

た事<sup>こと</sup>がありました。



よしひで じゅうごさい 良秀には、十五歳になる一人娘がいました。娘は むすめ おおとのさま やしき こにようぼう 大殿様のお邸に、小女房として仕えていま

した。この娘は むすめ ちちおや まった 父親には全く似ていない、愛らしい子でした。

しかも、母親を早くに亡くしたせい、思いやりがあつて、大人びていて、頭もよく、年のわ

りにしつかりしていて、気が利く子だったので、他の女房たちだけではなく大殿様からもとても

可愛がられていたようです。

貴族に仕える若い女

ある日、<sup>ひ</sup>大殿様に小猿が贈られました。<sup>おおとのさま こざる おく</sup>

いたずら好きな大殿様の息子が、その小猿に良秀という名前をつけていじめたため、小猿はみ

んなから馬鹿にされました。<sup>ばか</sup>

ある日、<sup>ひ</sup>小猿は大殿様の息子に<sup>こざる おおとのさま むすこ</sup>

「みかん泥棒、待て、待て」と言われ、<sup>どろぼう ま ま い</sup>

逃げていました。<sup>に</sup>



小猿は、良秀の娘の着物を握って哀れな声を上げました。娘は「小猿は動物です。どうか許

してあげてください」とかばいました。娘と小猿が仲良くなったのは、それからの事でした。

小猿は、どんな事があっても、娘のそばを離れなくなりました。



ある日、娘が風邪で寝ていた時には、小猿はきちんと枕もとに座り、心細そうな顔で、ずっと自分の爪を噛んでいました。

こうなると不思議なもので、今までこの小猿をいじめていた人たちも、

誰も小猿をいじめなくなりました。



よしひで ひと 良秀のたった一つの人間らしいところというのは、異様なまでに娘を、可愛がっていた事で

す。よしひで むすめ 良秀の娘にちょっとでも近づく悪者がいたら、町の若者たちを集めて、暗闇でこっそり殴ら

せようとするくらいだったのです。

ある時、とき 大殿様が「稚児文殊」ちごもんじゆの絵を描かせた時、良秀は、お気に入りき いの娘の顔を絵に写し

て、すば 素晴らしい作品を仕上げました。

知恵の仏を寺に仕える子供に表した絵

おおとのさま たいへんまんどく  
大殿様も大変満足されて、

「ほうびにほしいものを言え、何でもやろう」

とおっしゃいました。すると良秀は、かしこまって、

「どうか娘を家に帰してください」

とはっきりお願いしたのです。



他のお邸ほかやしきならともかく、堀川ほりかわの大殿様おおとのさまのそばで仕つかえている娘むすめを、ただ可愛かわいいという理由りゆうで帰かえ

してほしいというのは、とても失礼しつれいな事ことでした。

だから大殿様おおとのさまも、しばらく黙だまって良秀よしひでを見つめた後あと、「それはならぬ」ときっぱりおっしゃっ

て、そのまま席せきを立たってしまいました。

こんな事ことが、四し、五回ごかいはあったと思います。大殿様おおとのさまが良秀よしひでを見る目めは、そのたびにだんだん冷つめ

たくなってきました。大殿様おおとのさまが娘むすめの事ことを好きだという噂うわさがどんどん広ひろまりました。

そのような中、大殿様は急に良秀を呼び出して、「地獄変の屏風を描け」と命じられました。

「地獄変」の屏風というと、私はもうあの恐ろしい絵の景色が、すぐにはつきりと目の前へ

浮かんでくるような気がします。

同じ「地獄変」といっても、

良秀が描いたのは、他の絵師と比べますと、

構図から違います。



これを描くために、あの恐ろしい出来事が起きたのです。

この屏風の地獄は、良秀が自ら体験した地獄だったのです。

良秀はそれから五、六ヶ月の間、お邸への訪問はしないで、屏風の絵ばかりに集中してい

ました。ある日、良秀の弟子の一人が、絵の具を溶いていますと、急に師匠が参りまして、「少

し昼寝をしようと思う。が、どうもこの頃は夢見が悪い。私<sup>わ</sup>が寝ている時、枕もとに座つても

日本語の一人称は非常に多彩です。「私」という漢字は「わたし」とも「わたくし」とも読むことができます。大殿、良秀や弟子、そして語り手の女御が使う「私」の読み方に注目して読むことで、人物像をより深く捉えることができます。大

「らいたいが」と言いました。

これは珍しい事ではありませんから、弟子は手を休めずに、「さようですか」と返事をしました。

良秀が肘を枕にして、疲れきった人間のように、眠りに入ると、枕もとにおります弟子の耳には、気味の悪い声が聞こえ始めました。

「なに、私に來いと言ふのだな。どこへ、どこへ來いと？ 奈落へ來い。炎熱地獄へ來い。

——誰だ。そういう貴様は。貴様は誰だ、誰だと思ったら」

恐る恐る良秀の顔を見ますと、口を大きく開けて、あえいでいます。

その後、喉をしめられるような呻き声に変わっただけだと思ひますと、やっと良秀は目を開いて、慌

ただしく起きました。

しかし、しばらくは恐ろしそうな目つき

をして、空を見つめておりました。



やがて我に返った様子で、「もういいから、あちらへ行ってくれ」と良秀は弟子に、今度はそつ

けなく、言いつけたのです。

しかし、これはまだよい方で、今度はまた別の弟子が師匠である良秀に、わざわざ奥へ呼ばれ

ますと、「ご苦労だが、また裸になってもらえるか」と良秀が言うので、弟子は服をぬぎすて

て、裸になりました。

すると良秀は顔をしかめながら弟子に「私は鎖で縛られた人間が見たいのだ。しばらく、私

の言う通りになってくれないか」と、冷たく言いました。元々この弟子は、逞しい若者でござい

ましたが、これにはさすがに驚いたと見えます。

良秀は、ほとんど飛びつくような勢いで、弟子の背中へ乗ると、相手の許可なく、鎖でぐる

ぐる巻きにしてしまいました。

そうして良秀が鎖をぐいと引くと――

でし からだ  
弟子の体はのけぞり、勢いよく

よこだお たお  
横倒しに倒れてしまいました。



その時の弟子は、手も足もむごたらしく折り曲げられており、動くのはただ首ばかりでした。

そこへ体中の血が鎖に止められたので、皮膚の色が赤くなりました。

良秀はそれを気にせず、弟子を眺めながら、同じようなスケッチを何枚も描きました。

その間、縛られている弟子が、どれほど苦しかったかは、何もわざわざ申し上げるまでもございません。

これらの事を聞いただけでも、良秀の狂った、薄気味の悪い夢中になり方が、おわかりに

なつた事でしよう。

最後にもう一つだけ、良秀の恐ろしさがわかる話をしましょう。

今度はまだ十三、四歳の弟子が、命にも関わりかねない、恐ろしい目にありました。

その弟子は、生まれつき色の白い、女のような男でした。

ある夜、良秀の部屋へ呼ばれて参りますと、良秀は燈台の火の下で、見慣れない一羽の鳥の

世話をしていました。耳のように両方へつき出た羽毛といい、琥珀のような色をした、大きな円

い目といい、見たところも何となく猫に似ていました。

弟子は、机の上のその異様な鳥も、「地獄変」の屏風を描くの必要に違いないと考えなが

ら、良秀に「何かご用ですか」と、言いました。

すると、良秀はまるでそれが聞こえないように、「どうだ。よく馴れているだろう」と、

鳥の方へあごを向けました。

「これは何というものでございましょう。」

私は、見た事がございませんが」弟子はそう言いながら、この耳のある、猫のような鳥を、気味悪



そうにじろじろ眺めますと、良秀は相変わらず嘲笑うような調子で、「なに、見た事がない？ 都育

ちの人間はこれだから困る。これは二、三日前に狛師が私にくれた耳木兎という鳥だ。ただ、

こんなに馴れているのは、沢山いないだろう」と言いながら、耳木兎の背中の毛を、そつと撫でま

した。すると、鳥は急に鋭い声で、短く鳴いたと思うと、突然、机の上から飛び上がって、両脚

の爪を張りながら、いきなり弟子の顔へ飛びかかりました。

弟子は、狭い部屋の中を、

あちらこちらと逃げ惑いました。



しかし弟子が最も恐ろしかったのは、良秀がその騒ぎを眺めながら、女のような少年が異形

な鳥に襲われる、物凄い有様をスケッチしている事でした。弟子は、あまりにも恐ろしかったた

め、良秀の為に、殺されるのではないかと思った、と申しおりました。

こういう事は、何度もありました。冬になると、さらに良秀の様子も暗くなり、物言いも目に

見えて、荒々しくなってきました。それと同時に、屏風の絵はすでに八割ほど完成していました

が、今までに描いたところを、塗り消しかねないくらい、良秀はおかしくなっていました。

いっほう  
一方では、良秀の娘が、何故かだんだん落ち込むようになっていきました。

ある夜、私が一人で廊下を通りかかりますと、あの小猿がいきなりどこから飛んできてまし

て、私の袴の裾をしきりにひっぱるのです。

そこで私も小猿がひっぱる方へ歩いていきました。



その時、部屋から飛び出してきた女に

私は危くぶつかりそうになりました。女は

そのまま私の前に転び、息を切らしながら、

私の顔を、何か恐ろしいものでも見る

ように見上げました。

この女は良秀の娘でした。乱れた袴が、幼さとは変わった色気を見せています。



その晩ばんのあの娘むすめは、まるで人間にんげんが違ちがったように、私わたくしの目めに映うつりました。これが実際じっさいあの弱々よわよわ

しい、何事なにごとにも控ひかえ目めな良秀よしひでの娘むすめでしょうか。

私わたくしは慌あわただしく部屋へやから出でて遠とおのいて行く男おとこの足音あしおとの方ほうを指ゆびさし、あれは誰だれですかと静しずかに

目めで尋たずねました。

娘むすめは黙だまって首くびを横よこにふりました。何と声こえをかけていいのかわからなくなった私わたくしは、しばらく

の沈黙ちんもくの後あと、娘むすめに向むかって、「もうお帰かえりなさい」とやさしく言いいました。

すると、誰か<sup>だれ</sup>がまた私<sup>わたくし</sup>の袴<sup>はかま</sup>の裾<sup>すそ</sup>を、後ろ<sup>うし</sup>から恐<sup>おそ</sup>る恐<sup>おそ</sup>るひっぱりました。私<sup>わたくし</sup>は驚<sup>おどろ</sup>いて振<sup>ふ</sup>り

向<sup>む</sup>きました。すると、私<sup>わたくし</sup>の足<sup>あし</sup>もとにあの小猿<sup>こざる</sup>が、人<sup>にんげん</sup>間のよう<sup>りょうて</sup>に両手<sup>りょうて</sup>をついて、何<sup>なんど</sup>度も丁寧<sup>ていねい</sup>に頭<sup>あたま</sup>

を<sup>さ</sup>下<sup>さ</sup>げていました。



ある日、良秀は突然大殿様のお邸へ参りまして、大殿様へ次のように申しました。「地獄変」

の屏風ですが、ほとんどは出来上がっています」 「それはめでたい。私も満足じゃ」

しかし、こうおっしゃる大殿様の声には、何故か妙に力がありませんでした。

「いえ、それがめでたくないのです。私は、見たものでなければ描けないのです」

これをお聞きになると、大殿様の顔には、良秀を馬鹿にするような微笑が浮かびました。

「では地獄変の屏風を描こうとすれば、地獄を見なければなるまいな」

大殿様は、こう畳みかけてお尋ねになると、良秀は答えました。「私は鎖に縛られた者を見た

事があります。恐ろしい鳥に悩まされる者の姿も同様です。地獄の番人は、夢で何度となく、

私の目に映りました。――私の描こうとして描けないのは、そのようなものではございません

ん」

それには大殿様も、さすがに驚きになったのでしょうか。眉を陰しく動かしながら、「では何が

描けないと申すのじゃ」とおっしゃいました。

「私は屏風びやうぶの中に、檳榔毛びんろうげの牛車ぎゅうしゃが空そらから落ちて来きるところを描えがこうと思おもっています。その牛

車しゃの中なかには、一人ひとりのあでやかな女おんなが、燃もえ盛さかる炎ほのおの中なかで黒髪くろかみを乱みだしながら、悶もだえ苦くるんでいる

のです。そうしてそのまわりには、怪あやしげな鳥とりが十羽じゅうわとなく、二十羽にじゅうわとなく、嘴くちばしを鳴ならして飛と

びまわっているのです。——ああ、それなのに、その牛車ぎゅうしゃの中なかの女おんなが、どうしても私わたしには描えがけ

ないのです」

▲植物しょくぶつである檳榔びんろうの葉はを細こまかく裂きいて作つくった糸いとのようなもの

おおとのさま かお くら  
大殿様は顔を暗くしたかと思うと、突然大きな声でお笑いになりました。

そうしてその笑い声に息をつまらせながら、おっしゃいました。

「いいだろう。お前の望みどおり、檳榔毛の牛車を用意して火をかけよう。そして牛車の中に女

を一人乗せておこう。それを描こうと思いついたのは、さすがに天下第一の絵師じゃ。褒めてや

ろう」

大殿様のお言葉をお聞きしますと、良秀は体中の力が緩んだようで、畳へ両手をつくくと、

「誠にありがとうございます」と、聞こえるか聞こえないかわからない程低い声で、丁寧に

を申し上げました。これは大方自分の考えていた目論見の恐ろしさが、大殿様のお言葉につれて

ありありと目の前へ浮かんで来たからでしょうか。私はこの時だけは良秀が、気の毒な人間に

思われました。

それから二、三日した夜の事です。

大殿様が、良秀の恐ろしい願いをかなえてやる

夜が来しました。

ちょうどその夜は月のない、真っ暗な晩でした。

松明の火に照らされて、大殿様は、あぐらを組んで

座っていらつしやいました。

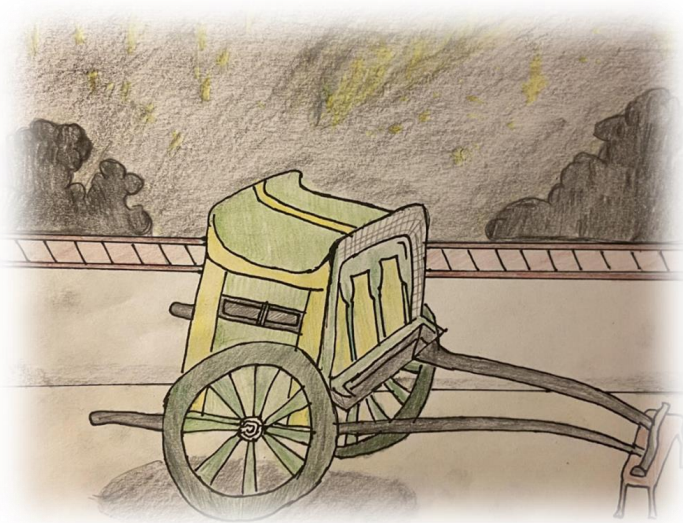


大殿様におおとのさまおそねがよしひでぎつしや牛車からやはな離れて座すわっておりまして。

しかし、その姿はすがたほしぞらおも星空の重みに

あつおも圧されたかと思うくらい、

ちいみ小さく、みすぼらしげに見えました。



時刻は真夜中にも近い時間でした。大殿様はしばらく黙って、やがて膝を進めると、「良秀」

と、鋭く呼びかけました。

良秀は返事をしたようですが、私の耳にはただ唸るような声しか聞こえませんでした。

「良秀。今宵はその方の望み通り、牛車に火をかけて見せてやろう」大殿様はこうおっしゃつ

て、そばの者たちの方をご覧になりました。何か大殿様とそばの者との間に、意味ありげな微笑

が見られましたが、これは私の気のせいだったかもしれません。

「よく見よ。あれは私が日頃乗る牛車じゃ。お前も覚えがあるだろう。――その車にこれから

火をかけて、目の前に炎熱地獄を作り出すつもりじゃ」

大殿様はお言葉をお止めになって、急に苦々しい調子で、こうおっしゃいました。

「その中には罪人の女房を一人、縛ったまま乗せてある。牛車に火をかけたら、その女は肉を  
焼き、骨を焦がして、四苦八苦の最期を遂げるであろう」

大殿様は肩をゆすつて、声も立てずに笑いながらおっしゃいました。

「それぞれ、<sup>すだれ</sup>簾<sup>あ</sup>を上げて、<sup>よしひで</sup>良秀<sup>なか</sup>に中<sup>おんな</sup>の女<sup>み</sup>を見せてやれ」

家来<sup>けらい</sup>の一人<sup>ひとり</sup>は、片手<sup>かたて</sup>に松明<sup>たいまつ</sup>の火<sup>ひ</sup>を高くかざしながら、つかつかと牛車<sup>ぎっしゃ</sup>に近づくと、片手<sup>かたて</sup>を伸ば

して、<sup>すだれ</sup>簾<sup>あ</sup>をさらりと上げて見<sup>み</sup>せました。燃<sup>も</sup>える松明<sup>たいまつ</sup>の光<sup>ひかり</sup>は、ひとしきり赤くゆらぎながら、た

ちまち狭<sup>せま</sup>い牛車<sup>ぎっしゃ</sup>の中<sup>なか</sup>を鮮<sup>あざ</sup>やかに照<sup>て</sup>らし出<sup>だ</sup>しました。むごたらしく、鎖<sup>くさり</sup>に縛<sup>しば</sup>られた女房<sup>にようぼう</sup>は――



ああ、誰だれが見間違みまちがいをするでしょうか。身みなりこそ違ちがえど、良秀よしひでの娘むすめに違ちがいありません。

私わたくしは危あやうく叫さけび声こえを立てそうになりました。

その時ときです。良秀よしひではこの景色けしきに、半なかば正氣しょうきを失うしなったのでしよう。今いままで下したにうづくまっていま

したが、急きゆうに立ち上あがったと思おもいますと、両手りょうてを前まえへ伸のばしたまま、牛車ぎゅうしゃの方ほうへ思おもわず走はしりかか

ろうとしました。この時とき、「火ひをつけろ」とおっしゃる大殿様おおとのさまのお言葉ことばと共に、家来けらいたちが牛車ぎゅうしゃに

松明たいまつを投なげました。

火は見る見るうちに、牛車をつつみました。

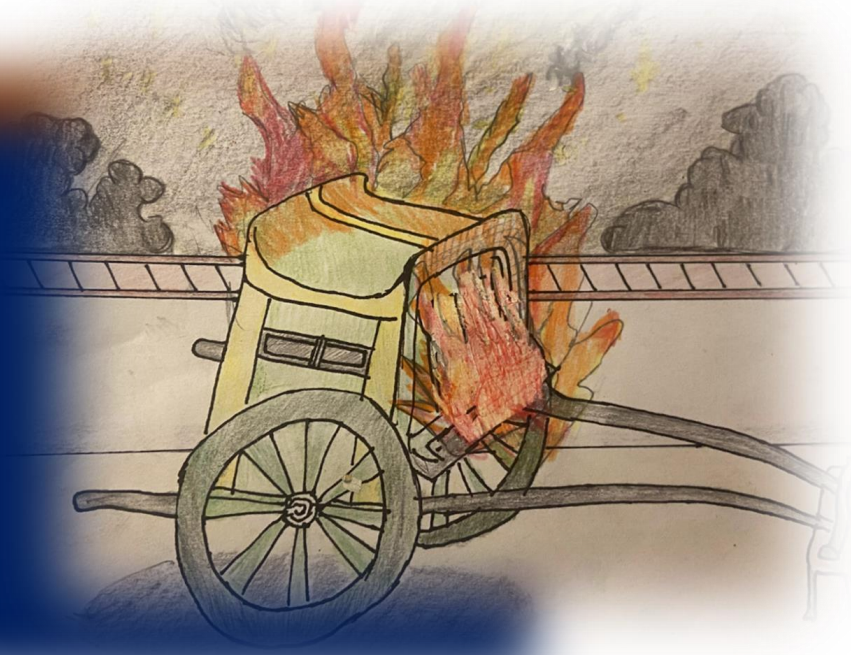
——その凄まじさと言ったらありません。

さきほど危く叫ぼうとした私も、

この時は、ただ口を開きながら、この

恐ろしい光景を見守るよりほかは

ありませんでした。



しかし親の良秀は――

良秀のその時の顔つきを、今でも私は忘れません。牛車の方へ駆け寄ろうとしたあの男は、

火が燃え上がると同時に、足を止めました。やはり手をさし伸ばしたまま、食い入るばかりの目

つきをして、牛車をつつむ炎と煙を吸いつけられたように眺めていました。

が、良秀の心に行き来する恐れと悲しみと驚きとが、はつきりと顔に描かれました。首をは

ねられる前の悪人でも、ああまで苦しそうな顔をしないでしよう。

大殿様は唇をお囁みになりながら、時々気味悪くお笑いになって、目も離さず牛車の方を見

つめています。その牛車の中は、何というむごたらしい景色でしょう。娘が苦しんでいる有様

は、本当の地獄のようで、私だけでなく力の強い侍まで身の毛がよだちました。

その時、どこからか何か黒いものが、物凄い速さで、お邸の屋根から火の燃え盛る牛車の中へ

飛びこみました。そうしてのけぞった娘の肩を抱いて、鋭い声を、何とも言えず苦しそうに、

長く煙の外に飛ばしました。

つづ  
続いて、また、二声、三声――。私<sup>わたくし</sup>たちは、同時<sup>どうじ</sup>にあつと叫<sup>さけ</sup>びました。

よしひで　むすめ　かた  
良秀の娘の肩にすがっているのは、堀河<sup>ほりかわ</sup>のお邸<sup>やしき</sup>に鎖<sup>くさり</sup>で繋が<sup>つな</sup>がれていた小猿<sup>こざる</sup>だったのですから。

こざる　すがた　み  
が、小猿の姿が見えたのは、ほんの一瞬間<sup>いつしゆんかん</sup>でした。火<sup>ひ</sup>の粉<sup>こ</sup>がひとしきり、ぱつと空<sup>そら</sup>へ上<sup>あ</sup>がった

おも　こざる　むすめ　すがた　くろ　けむり　かく  
かと思ううちに、小猿はもとより娘の姿も、黒い煙に隠<sup>かく</sup>されていました。お庭<sup>にわ</sup>の真<sup>ま</sup>ん中<sup>なか</sup>にはた

ひ　くるま　すす　おと　も  
だ、火の車が凄まじい音をたてながら、燃<sup>も</sup>えているばかりでした。



その火を前にして、固まったように立っている良秀は、——何という不思議な事でしよう。今

は、言いようのない輝きを皴だらけな満面に浮かべながら、両腕をしっかり胸に組んでたたず

んでいます。それがどうもあの男の目の中には、娘の悶え死ぬ有様が映っていないようなので

す。ただ美しい火の色と、その中に苦しむ女人の姿。本当の地獄が、限りなく良秀の心を喜

ばせている——そういう景色に見えました。

しかも、その時の良秀には、何故か

人間とは思われない、怪しげな

神々しさがありました。



私<sup>わたくし</sup>たちは、みな息<sup>いき</sup>をひそめながら、身<sup>み</sup>の内<sup>うち</sup>も震<sup>ふる</sup>えるばかり、異<sup>い</sup>様<sup>よう</sup>な喜<sup>よろこ</sup>びが心<sup>こころ</sup>に充<sup>み</sup>ち満<sup>み</sup>ち

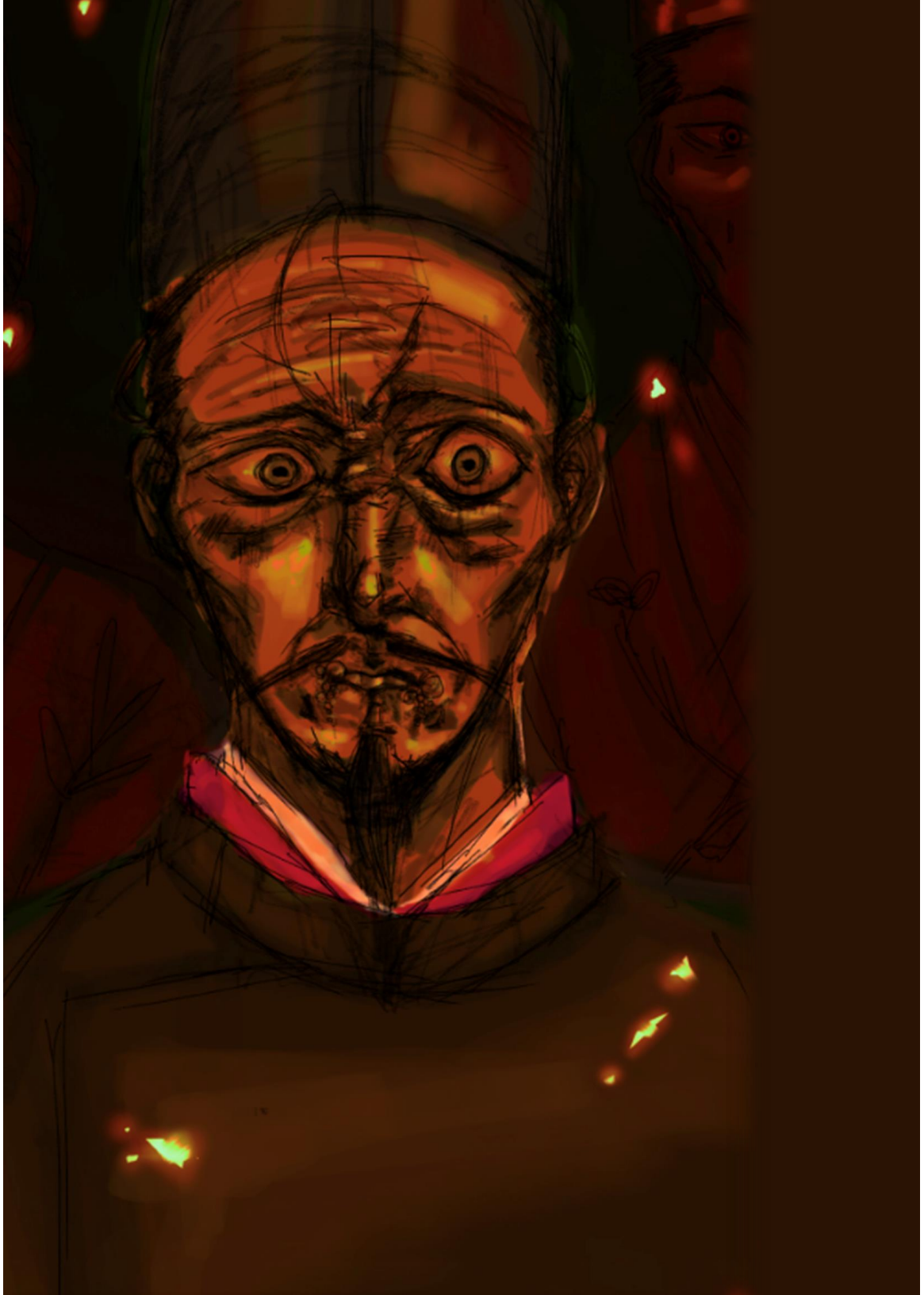
て、目<sup>め</sup>も離<sup>はな</sup>さず、良<sup>よし</sup>秀<sup>ひで</sup>を見<sup>み</sup>つめました。牛<sup>ぎ</sup>車<sup>っしゃ</sup>の火<sup>ひ</sup>と、それ<sup>たましい</sup>に魂<sup>うば</sup>を奪<sup>た</sup>われて、立<sup>た</sup>ちすくんでいる

良<sup>よし</sup>秀<sup>ひで</sup>と――

その中<sup>なか</sup>でただ、大<sup>おお</sup>殿<sup>との</sup>様<sup>さま</sup>だけは、ま<sup>べつ</sup>るで別<sup>じん</sup>人<sup>にん</sup>のようでした。お顔<sup>かお</sup>の色<sup>いろ</sup>も青<sup>あお</sup>ざめて、口<sup>くち</sup>元<sup>もと</sup>に泡<sup>あわ</sup>をお

た<sup>ひざ</sup>めになりながら、膝<sup>りようて</sup>を両<sup>りよう</sup>手にし<sup>ひざ</sup>っかりつか<sup>ちようどのど</sup>んで、丁<sup>か</sup>度<sup>わ</sup>喉<sup>けもの</sup>の渴<sup>かわ</sup>いた獣<sup>けもの</sup>のよう<sup>けもの</sup>にあ<sup>あ</sup>えぎつづ<sup>あ</sup>けてい

ら<sup>あ</sup>っしや<sup>あ</sup>いました。



その夜、お邸で大殿様が牛車をお焼きになった事は、誰の口からともなく町人へもれまし

た。それについては随分いろいろな批判をする人もいたようです。それから、目前で娘を焼き殺

されながら、それでも屏風の絵を描きたいという良秀の気持ち信じられないと言われたように

す。横川の僧都様などは、こういう考えに味方をしたお一人で、「いかに一芸一能に秀でようと

も、人として大事な心がなければ、地獄に堕ちるぞ」などと、よくおっしゃいました。

仏教において僧侶を監督する役割を持った人

ひとつき ひとつき  
一月ばかり経って、いよいよ「地獄変」の屏風が出来上がりますと、良秀は早速それをお邸へ

も 持って行き、大殿様に見せました。

ちようど とき そうずさま  
丁度その時は、僧都様もいらっしゃって、屏風の絵を一目ご覧になりました。それまでは苦い

かお よしひで ほう  
顔をしながら、良秀の方をじろじろと睨みつけていらっしゃいましたが、思わず膝を打って、

みごと  
「見事だ」とおっしゃいました。





この言葉をお聞きになつて、大殿様が苦笑した時のご様子も、未だに私は忘れません。

それ以来、良秀を悪く言う者は、少なくともお邸の中では、ほとんど一人もいなくなりまし

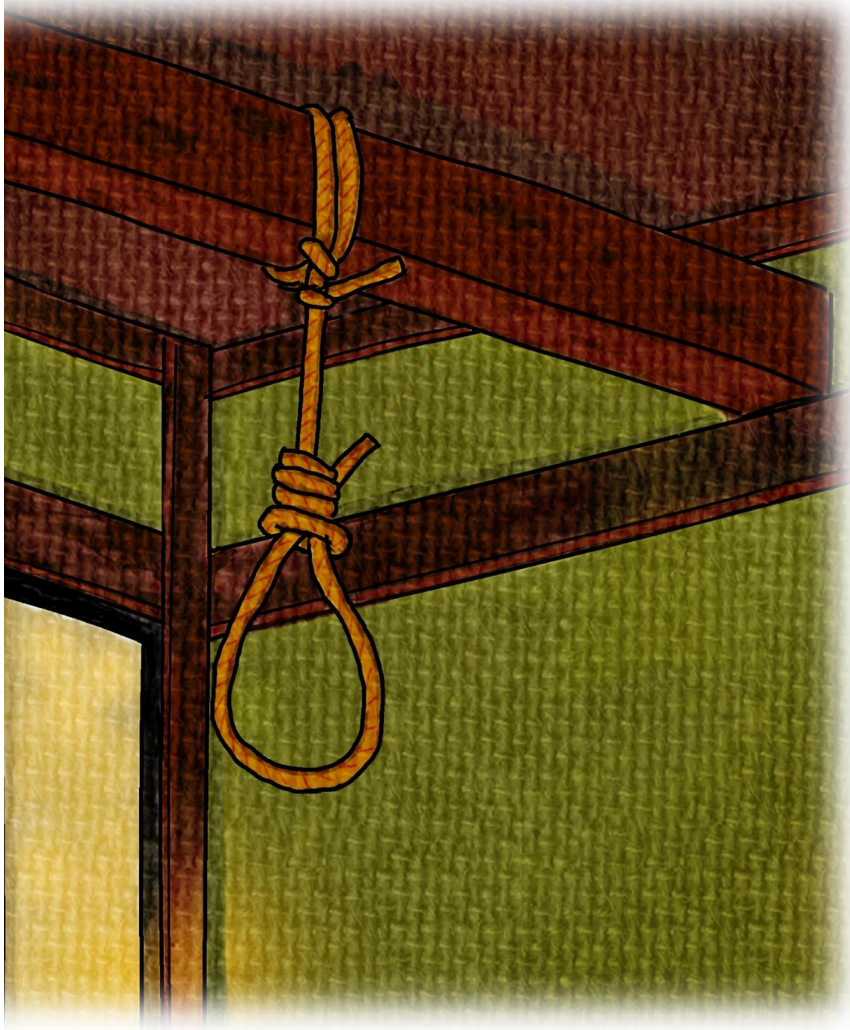
た。誰でもあの屏風を見る者は、不思議におごそかな心もちになつて、炎熱地獄の大苦難を

鮮明に感じるからでしょうか。

しかし、そうなった時には、良秀はもうこの世にはいませんでした。

の  
非常に大きな苦しみ

びようぶ できあ つぎ よる  
屏風の出来上がった次の夜に、  
じぶん へや はり なわ  
自分の部屋の梁へ縄をかけて、  
し  
死んだのです。



死し体たいは今いまでもあの男おとこの家の跡いへに埋あまっています。小ちいさな標しるしの石いしは、その後何十年のちなんじゅうねんかの雨風あめかぜに

さらされて、とうの昔むかしに、誰だれの墓はかともわからないくらい苔こけが生はえているにちがいありません。





---

あくたがわりゅうのすけ  
芥川龍之介

---

めいじ 25 (1892) ねん、とうきょう う とうきょうていこくだいがくがくせい さいつか  
明治25 (1892) 年、東京生まれ。東京帝国大学在学中に作家  
としてかつどうをはじめる。たいしょう 5 (1916) ねん、はつぴょう した はな し  
大正5 (1916) 年に発表した『鼻』が師で  
あるなつめ そうせき ぜっさん いちやくゆうめい ひと ところ うらがわ  
ある夏目漱石に絶賛され、一躍有名になる。人の心の裏側やエゴ  
イズムをたく えが いた『ろしょうもん』『じごくへん』などのめいさく つぎつぎ  
『羅生門』『地獄変』などの名作を次々と  
はつぴょう たんべんしょうせつ めいしゆ にほんぶんがくし おお そくせき のこ  
発表。短編小説の名手として日本文学史に大きな足跡を残した。

|                       |                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|-----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| タイトル                  | <sup>たどく ほん</sup> にほんご多読の本 レベル 5 <sup>じごくへん</sup> 『地獄変』<br><sup>げんさく あくたがわりゅうのすけ げんさくもと あおぞらぶん こ</sup><br>原作 芥川龍之介 原作元データ 青空文庫<br><a href="https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/60_15129.html">https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/60_15129.html</a> |
| <sup>ぶん</sup> 文・イラスト  | <sup>らんじゅく こすもす</sup><br>蘭 塾（あいこ＋宇宙・どりいーむ・のん＋なぎ＋まり）<br><a href="https://www.ashitamirai.org/">https://www.ashitamirai.org/</a>                                                                                                                                      |
| <sup>はっこう</sup> 発行    | <sup>にほんごきょうしかい</sup><br>オランダ日本語教師会                                                                                                                                                                                                                                 |
| <sup>せいさく び</sup> 制作日 | <sup>ねん がつ にち</sup><br>2026年7月18日                                                                                                                                                                                                                                   |

<sup>さくひん じだいはいけい ものがたり ふん い き こうりよ けっか いちぶ げんざい きべつてき</sup>  
 作品の時代背景と物語の雰囲気<sup>を</sup>考慮した結果、一部、現在では差別的とみなされる<sup>ことば ふく</sup>言葉が含まれている可能性<sup>かのうせい</sup>がありますが、原作<sup>げんさく い と そんちよう と い</sup>の意図を尊重し取り入れたことを<sup>りようしょう</sup>ご了承ください。

©オランダ<sup>にほんごきょうしかい</sup>日本語教師会2026  
<sup>むだんでんさい いんよう きんし</sup>  
 無断転載・引用は禁止します。





オランダ日本語教師会

Dutch Association of Japanese Language Teachers

